



「学生の興味」と「教えたいたいこと」

人間科学部 大塚 明子



1994年に文教大学女子短期大学部に着任。2003年に人間科学部人間科学科に異動し、社会文化コースに所属する。専門は社会学、特に日本社会史および大衆文化・若者文化。最近は近代日本における「愛」の理念と家族、J-POPにみる若者意識などを研究している。本学の講義では「社会学概論」「社会学理論」「ジェンダー論」「現代文化論」「文化社会学」ほかを担当。(おおつか・めいこ)

教えることに関しては経験値ほぼ0の状態、本学の女子短期大学部に赴任して10年あまり。「学生の興味」に可能な限り応えるよう工夫しつつ、「大学教員として教えたいたいこと・教えるべきこと」とどうバランスをとっていかを考えている。今回は講義「現代文化論」と演習「人間科学の基礎」を例として、担当している授業の具体的な進行をご紹介します、諸先生方のご意見・ご批判を仰ぎたいと思う。

1. 大学教員としての原点と現在の課題

大学教員というのはある意味で不思議な職業だと思う。漠然ながらも追求したいテーマがあって研究者を志し、大学院までひたすら研究会やら論文書きやらに没頭する。そして運よく就職が決まると、その日から突然メインの仕事が「教育」になるのだ。私は学部の人に教職もっていなかったもので、教えるということに関してほぼ0からのスタート。そして大学という職場には新入社員(?)研修ももちろんない。自分なりに試行錯誤の連続だった。

振り返ると、初めて教員として立った現場が本学の女子短期大学部(の、今はなき文芸科)だったことが、自分の原点になっている。大学院時代に慣れ親しんでいたマクロで抽象

的な問題設定や議論のスタイルが、短大生には一切通用しない(まあ当然ですが。そもそも年齢が違うし)。日々小さなカルチャーショックを繰り返しながら、「学生の関心のありかを可能な限り探りだし、それに応じて授業を作り上げる」という基本姿勢が、この時代に骨身に染みついたように思う。

言い換えれば、当初は「何を教えたいか・教えるべきか」という教育者としての主体性は二の次で、とにかく「学生のニーズに応える」べく努力していた。つまらなそうに寝ている学生諸君を教壇から目の当たりにするのが、精神衛生上きつかったからだ。

現在も教室の反応が気になってしまうのは変わらない。他方で、新米教員の頃と比べると、「学生に何を教えたいか・教えるべきか」

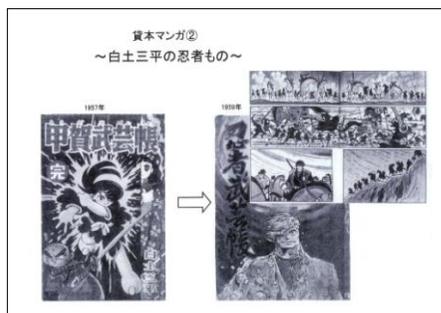
という理想像のほうも自分なりに明確になってきた。「学生が興味をもっていること」と「大学で学ぶべきこと」の2つをどう融合させバランスをとるかを、現在大きな課題として考えている。

2. 講義科目：ビジュアル資料の重要性

短大で講義をしていく中ですぐ気がついたのが、ビジュアル資料の重要性である。同じ内容を話しても、何らかの具体的なビジュアル資料が加わるのとならないのでは、学生の食いつきがまったく違う。そこで授業のテーマに関連する写真・グラフ・歌詞などを多数 OHP 用のスライドにし、映像もビデオで集めるようにした。人間科学部に異動した頃からはパワーポイントと DVD に移行。短大2年目くらい以降、話と板書だけという講義は、おそらく1回もしたことがない。

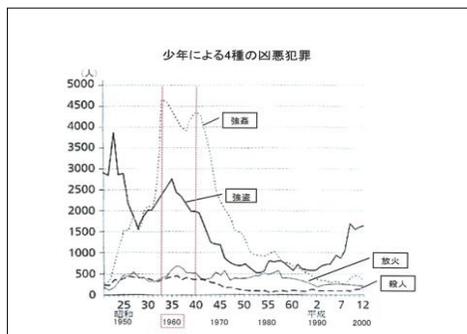
映像を見せる場合、学生の興味をひく効果が高い反面、緊張感を維持するのも難しいと感じる。教室も暗くするので、長すぎると睡魔に負ける人が多数出現。そのためなるべく1回10分以内にし、その映像が伝える意味についての解説を適宜入れるようにしている。ビデオから DVD に替わり、細かい編集が可能になって格段と使いやすくなった。デジタルメディア万歳!である。

またパワーポイントの導入により、OHP スライドとは比較にならないほど詳細で、分かりやすい資料の作成が容易になった。反面、ともすると情報量が多くなりすぎる傾向がある。学生が時間内に消化可能な量を超えてしまわないよう、適切かつ最小限に絞ることを心がけている。論理的なポイントは板書するほうがメリハリ上もスピード的にもいいように感じるので、パワーポイントは基本的にビジュアル専用としてきた（歌詞を見ながら歌を聞く場合は文字だけだが）。



パワーポイント資料 ①

ただ最近、前回の授業の板書を復習する場合や、黒板に1度にうまく書き切れない大きな図式・モデル等に関しては、文字中心のスライドを作るようになった。また後述する出席票のコメントで学生からの要望が多かったので、重要なグラフや図式に限り、パワーポイント資料をプリントにして配布している。



パワーポイント資料 ②

いずれにせよ講義の基本としては、まずその日のテーマについて概略を話し、映像・グラフ・画像などを見ながら解説し、さらに板書でまとめる——という作業を繰り返している（このためスクリーンが黒板にかぶさる形だと上げ下げが大変で、別々になっている教室に当たるとラッキーだと思う）。話すこと・ビジュアル資料の提示・板書の配分を考えると、1時間のうちにスライド10～15枚、10分以内に編集した映像2～3本が上限だろうか。

3. 2年次講義「現代文化論」

2年次の必修科目「現代文化論」（約140名受講）のある日の授業例から、より具体的に

紹介したい。この日のテーマは「高度成長期におけるマンガの発達とその社会背景」。

まず、授業の初めに出席票（+あればプリント）を配布する。「大福帳方式」と呼ばれるもので、学生1人につきA4が1枚、毎回2行程の質問やコメントを書いてもらう形式である。回している間、復習をかねて先週出た質問に答える。このやり方は、人科の他の先生がやっていらしたのを参考に今年度から取り入れたのだが、学生へのフィードバックができよい方法だと感じている。ただ授業の進行に思わぬ影響が出てきたのも事実で、これについては後述する。

さて、質問に答えた後、本論に入る。この日取り上げた項目とビジュアル資料（()内、今回はパワーポイントのスライドのみ）の概略を示すと：

- ・手塚治虫の初期作品における心理表現の限界（『リボンの騎士』の該当場面3枚・最近の少女マンガ1枚）
- ・子供マンガの発展（初期の少女マンガ2枚・『少年マガジン』創刊号表紙など1枚）
- ・貸本劇画の誕生と社会背景（白土三平の作品など5枚・集団就職の写真1枚・少年による凶悪犯罪の時代的推移などグラフ2枚）
- ・マンガ表現の高度化（手塚作品の略年表・『ガロ』表紙など・つげ義春各1枚）

最後に出席票に質問なりコメントなりを書いてもらい、教室のブロックごとに提出して終了という流れである。

実は今回の授業は、昨年度と比べて大幅に膨らんでしまった。貸本劇画関係のスライドを、これまでは手塚作品と比較した簡単な1枚ですませていたのだが、今回さらに5枚追加したからである。なぜそうしたかという、この前の回で手塚治虫が日本のマンガにもたらした革新について話したのだが、それに対する授業中・出席票の反応があまりによかったからだ（次の回、それまで教室の真ん中あたりの席に座っていた学生が、わざわざ最前列近くまで移動していたのには苦笑した）。

学生の多くがマンガという身近な文化に強い関心をもっていることがひしひしと伝わ

ってきて、従来は省略していた白土三平・水木しげるといった作家も紹介し、より細部に踏み込んだわけだ。この変更は成功だったようで、受講者がいつもよりずっと目を輝かせて聞いていた（ような気がする）。だが、当然ながら、その分あとで他のテーマを削ることになる。

この「現代文化論」は、現代社会と文化の特質と大きな流れを掴むことをねらいとしている。そのため史上初めて高度大衆消費社会が確立した「黄金の50年代」のアメリカから始め、60年代のカウンターカルチャーの盛り上がりとその後代への遺産について論じ、その後日本の若者文化に移るという構成にしている。なるべく90年代以降、現在に近い時点まで取り上げたいのだが、今年度は学生の質問に答えて各回とも昨年より膨らむ傾向となり、オタクカルチャーなどは外さざるをえなくなった。今年のはたまたま臨時で「メディア文化論」の集中講義を担当するため、そちらに回すことにしたが、来年からはそうもいかない。学生の関心に応じて丁寧に論じることと、現代文化の流れを巨視的に捉えること—この2つのバランスはもっとも頭を悩ませるところである。

また毎年のことだが、テーマがアメリカから日本に移ると、教室全体で関心度が少し上昇するように感じる。出席票のコメントでも、「やっ和日本」「アメリカ文化より興味深く聞ける」といった声がかっこうあった。やはりほとんどの学生の関心は「身近で具体的な細部」に集中する傾向がある。これは自然なことだし、ある意味で健全だとも思う。他方で、より深く日本を理解するためにも、他の社会や文化について知ってほしい。60年代の若者文化に果たした役割においてアメリカのロックと日本のマンガが一定の機能的等価性をもつこと、またその社会的・文化的要因等々、より抽象度の高い分析図式にも目を向けてもらいたいのだが一なかなか難しい。

「学生が興味をもっていること」と「大学で学んでほしいこと」のバランスは、私の専門である社会学の場合、ミクロな細部とマク

ロな動向、具体と抽象の往復という課題とかなり重なってくる。ただ「神は細部に宿る」で、特に文化研究では、細部に関する知識とその面白さに対する感受性を培うことが、まず初めに必要なかもしれない。「現代文化論」以外の講義科目との関連も含めて、試行錯誤が続きそうだ。

4. 1年次演習「人間科学の基礎」

次に、「学生の興味」というより、「大学で学ぶべきこと／学んでほしいこと」の比重が圧倒的に高い授業を取り上げたい。人間科学部に入学してきた1年生が春学期に全員履修する演習科目「人間科学の基礎」(1クラス35名前後)、通称「人基礎(ジンキソ)」である。これはいわゆる「導入教育」のクラスで、大学生活に馴染ませるとともに、大学で学ぶための心構えや基本的スキルを修得することが目的である。クラスのホームルーム的な性格もあり、学生から希望があった場合、球技大会や文化祭のための話し合いに1~2時間割くことも多い。この「導入教育」については、以前「大学授業研究会」で発表させていただいたことがあり、その時に他大学の取り組みも多少調べてみた。近年はどの大学でも力を入れる傾向にあり、内容的には次の2つがほぼ中核のようだ。

A. スチューデント・スキル

・大学生活をどう過ごすか、時間管理、進路選択への動機づけ(適性テスト)など。

・グループワーク・合宿などを通じた人間関係づくり。

・教員との接し方(オフィスアワーの利用など)。

B. スタディ・スキル

・ノートのとり方。

・試験の受け方。

・本・資料の読み方。

・図書館ガイダンス。

・レジユメの作り方。

・レポートの書き方(文章表現も含む)。

・プレゼンテーションの仕方。

・ディスカッション・ディベート。

「人基礎」は半期なので、これらの項目を

全て取り上げる余裕がない。また文教の学生には、ノートのとり方までは必要ないように感じている。そこでレジユメの作成・図書館ガイダンス・プレゼンテーション・レポートの書き方といった点に重点をおくこととした。演習ではパワーポイントでレジユメ的な資料を作り、各自にプリントで配布し、映しながら説明する。今年度の大まかな流れは次のようにしていた：

(1)オリエンテーション(授業の紹介・大学とは何か・自己紹介)

(2)レジユメの作り方(説明→新聞記事・例を配布→レジユメ作成①)

(3)グループ討論(約4人の小グループに分ける→1人がレジユメをもとに発表→新聞記事を批判的に検討→疑問・展開点などを全体の前で発表)

(4)図書館ガイダンス(グループ討論を通じて感じた疑問・展開点を各自調べる→3枚以内のプリントアウト・コピーを持ってくる→20分程度の発表のためのレジユメ作成②)

(5)プレゼンテーション①(数名ランダムに当ててレジユメをもとに発表)

(6)レポートの書き方①(感想文との違い・テーマの立て方・基本的な構成など)

(7)自己テーマの発表(大テーマごとに共同発表のグループ分け)

(8)レポートの書き方②(引用の仕方)

(9)プレゼンテーション②(大テーマで共同発表)

(10)自己テーマによる期末レポート

今年度は新しく(8)レポートの書き方②(引用の仕方)を導入してみた。日頃から2年生以上のレポートや卒論を見ていて、必要性を強く感じていたからだ。他者の意見を出典を明示して書く習慣をつけることは、著作権の尊重というだけでなく、自分自身の意見を明確にするためにも重要だと思う。ただやはり1年生には少し難しかったようだ。総じてこの演習は、「大学で学ぶべきこと」の基礎を積み上げることが目的なので、「学生の興味」と乖離しがちとなる。積極的に取り組める課題やグループワークをどう取り込んでいくか、さらに工夫していきたい。